

日常に溶け込むように

聞き屋・吉田敬一さん

宗教の本来の領分ともいえる「心のケア」という役割を担うため、日常に耳を傾ける僧侶もいる。

「聞き屋」と書かれた名刺を配るのは浄土真宗の単立寺院・西栄寺（兵庫県西宮市）の僧侶、吉田敬一さん（44）。2009年に愛娘・姉真ちゃん（当時7）を肺炎で亡くしたことをきっかけに、11年から「聞き屋」と書かれた看板を首から下げて駅前に立ち始めた。

生まれた時からダウン症と重度の心臓疾患を患っていた姉真ちゃん。献身的に支えてくれた病院関係者の姿に感銘を受けて「自分も誰かの苦しみに寄り添う僧侶になりたい」と思った。

駅前には週2回、2時間ほど立ち続けたが「誰一人、目もくれなかった」。ホームヘルパーの資格を取り、高齢者施設にも傾聴ボランティアとして訪れたが、市の紹介

のため「宗教者として」関わることができず、ふに落ちない部分があったという。

「私は僧侶で、子どもも亡くしている。私に話をすれば、きっとみんな楽になるのに」と、おごった気持ちで「他人の苦しみや悲しみを探し求めていたような気がします」

12年に「臨床宗教師」の育成を目的とする東北大学院・実践宗教学寄附講座に1期生として参加。研修の一環として東

北の被災地を行脚、仮設住宅も訪問した。関西に帰ってから緩和ケアホスピタルを訪れる中で気が付いた。「苦しみや悲しみは探さなくても、日常の中にあふれている」

「自己中心的な傾聴はただの押し付けになってしまいます。一緒にお茶を飲んだり、買い物に行ったり。『日常丸ごと』に寄り添い、耳を傾けることが『傾聴』だと気が付きました。今後は『日常の中に溶け込む臨床宗教師』を目指し、傾聴に取り組んでいく。